

スパゲッティ・サンドイッチ

リリー・ワイリー

私の19歳の誕生日、母さんと私は湯気の立つスパゲッティの鍋の前に並んで立っていた。台所は2006年から抜け出てきたようで、桜材の食器棚があり、所々にトスカーナ風の布巾が下がっている。台所の照明が薄暗く黄みがかっているのでパスタの大きな青い鍋を緑がかった色に見える。私たちは、瓶詰めのラグーソースでパスタを和える。母がずっとこだわり続けてきたおなじみのブランドだ。丸いテーブルの上で、白いイタリアンブレッドそれぞれ2枚ずつにバターを塗り、スパゲッティサンドイッチを作る。これは、何でも白いパンに挟んで食べていた祖父に影響されたものだった。

パンはぐちゅっと、上あごにくっつくから、サンドイッチをむさぼるのが難しい。ソースが後ろからはみ出して手を伝い、指先をオレンジ色に染める。麺は柔らかいが、しこしこして塩気も丁度いい。長い一日の終わり、私は母さんと向かい合って座り、素朴なサンドイッチを頬張りながら、心もお腹も満たされていくのを感じた。

二週間後、私はフィラデルフィアから空軍の基礎訓練へと出発した。車での移動はそれほど長くはない。なのに、朝の霧のせいか、いつもの様におしゃべりをせず、みんな黙ったままだった。緊張しているし、みんな朝早くて目が覚めてないんだ。それに、私が行っちゃう話もしたくないだろうし。すでに軍務経験のある家族から一通りの説明は受け、「大丈夫だから」と皆に口を揃えて言われた。なのに緊張して手のひらにじっとりと汗し、ホームシックでお腹が痛くなってしまう。

空港の車降り場で、母は私をぎゅっと抱きしめる。妹と私はターミナルの中へ消えていく。私が新たに軍人になったお陰で、17歳の妹は搭乗口で私と一緒に座ることが許された。ベンチに並んで座るけど、ほとんど話さない。妹は明らかに何を言えばいいのか分からない様子。私はどうしたら泣き出しそうになるのをこらえられるか分からなくて、ちょっと恥ずかしい。これ、気まずいよなあ。何だか、自分が妹の前で強くいられないことが情けなくなってきた。私は姉として尊敬されるべきなのに、私は彼女の目をまともに見ることすらできない。搭乗案内が流れ、私たちはぎこちなく抱擁した。そして、妹が小走りでターミナルを戻っていくのを見送る。

「あたしも家に帰りたいな。」

飛行機の座席に着くと、苦しくなって動揺してきた。どんなふうに考え直しても、家を離れたくなし、軍に入りたくない。動揺を隠すため、冷たい機内の窓に顔を押し当てる。冷たさが少しでも不安を和らげてくれることを願いながら。震える息を整えようとしながら、これからの八週間、サンアントニオのラックランド空軍基地で過ごす日々に向けて心の準備をする。二度の乗り継ぎとしんと静まり返ったバスの移動を経て、私はついに基地の駐機場に降り立った。一日中狭い飛行機の座席に丸まっていたせいで、足取りはぎこちない。ほぼ十二時間にも及ぶ長旅だった。父が話していた名高い「黒い帽子」が見えた時、思わず下を向いてしまった。父はその話をするとき、微かに肩をこわばらせていた。私はずっと人混みの外側を歩く。ちょっとでもヘマをすれば、訓練生の顔すれすれまで訓練教官が黒い帽子のつばを押し付け、怒鳴り声を浴びせる。彼らの顔は、灼熱のテキサスの陽射しの下で赤く染まっている。

私たちは広場で装備を受け取る。黒いリュックサック、再利用可能な水筒、ノートとペン、基礎軍事訓練の教本、爪切り、足用パウダー、ゴミ袋と洗濯袋、反射ベルト、南京錠、タオル、そして収納コンテナ。その後、私たちは隊列に分けられ、駆け足で部隊へと向かう。そこは大きな薄茶色の建物で、コンクリートの柱の上にそびえ立ち、その下には訓練用の広場が広がっている。柱の間を歩いて建物の下を歩くと、今日流した涙がまた目に滲んだ。吹き抜けの広大な空間には、バスケットボールコートよりも長いアメリカ国旗が掲げられ、夕陽に照らされていた。

胸が詰まって、バクバクして、モヤモヤする。国に貢献する誇りと機械に組み込まれる嫌気が交錯する。列に並び、座れと言われれば座り、装備袋から泥のついた緑のパッケージを取り出す。

軍訓練官が私たちに大声で、携帯食の扱い方を説明する。私は手が震え、汗ばんで、分厚いプラスチックが開けられない。隣では、別の訓練官が航空隊員に唾を吐き、隊員たちに立ち上がって、「アメリカ空軍！」と叫び、座ってまた立ち上がる事を強要している。その音はコンクリート天井から反射して、私の頭蓋骨と背骨が振動する。訓練官が唾を吐き、航空隊員達が急いで動く体の音で頭が混乱する。基礎訓練がどんなものが警告されていたが、怒鳴り声、急いで動く音、汗で、震える。

ゆっくり呼吸して、緊張と喉の奥から嘔吐しそうなのを堰き止めようとする。でも、私の指は滑るし、弱々しい。パニック状態を何とかしようと悪戦苦闘するにつれて、さらに恐怖感が増す。

薄茶色のブーツが私の横で止まった。

「訓練員、手伝いが必要か？」私は見上げたが、訓練官の顔が帽子のつばで隠れて見えない。

「はい。」

「はい、訓練官！」訓練官は前屈みになって私の顔に向かって吠え、私の食糧袋を開ける。私は表示に気がついた。サウスウェスト・ビーフと黒豆。私はしかめ面をして、袋の中身を取り出した。中にはチーズ・スプレッドと棒状の肉がある。

私はかの食事の入った袋を触るなんて、とんでもないと思う。

私は元々黒豆が好きではないし、特に感触と匂いが嫌なので、食べる気がしない。チーズはねっとりして、塩気があって、ゴムみたいだ。私はチーズソースを吸い込んで、肉を齧るのを繰り返す。肉は硬くて噛み切りにくい。私は獣のようにかがみ込み、チーズと肉を交互に口にするが、噛んでいるうち顎が疲れてしまう。内蔵的な光景だ。

空腹が渦巻いて恐怖と結びつく。（どれだけ早くお腹いっぱいになれるかな。）左右に目を動かすと、ブーツや携帯食のプラスチック包装、もう一人の訓練官の唇から垂れている唾が視野に入ってくる。今は空腹感の事で頭がいっぱい。お腹空いた、空いた、空いたよお。もっと食べ物をあさる前に、十分間経ち、訓練官が整列する時間だと告げる。私達は上の階の寮に駆け足で上がり、着替え、各自のベットに横たわる。

暗闇の中で、まだ男の空軍隊員が、「アメリカ空軍！アメリカ空軍！」と叫んでいる声が聞こえる。

三週間目に、食堂が怖くなった。

平べったくて広い建物の外に気をつけして立ち、前に立っている僚機の後頭部を注視する。食堂の出入りの流れを整理する係が、訓練官が中に居ると告げる。整理係は気の毒だけど、この三週間、自分が係になるのは回避してきた。食堂交通整理係の仕事を見た事は無いけれど、係が仕事の話をしている時、緊張しているのが言葉の端々から聞き取れる。空軍隊が食堂に到着した、と知らせるのは簡単ようだけど、食堂の訓練官に気に留められるのは怖い。訓練官は唖れた大声で話す。

私達は食堂の列に並ぶと、真っ直ぐ前を見たまま横に移動する。訓練官は私達の真後ろを威嚇的に歩くが、食事をくれる民間人は優しい。私が「有難う。」と言うのを覚えていると、笑って即席マッシュポテトを沢山くれる。煮た鶏胸肉もくれる。私は自分のトレーをしっかり握り、次の整理員まで行進し、右に移行して席の前に立つ。訓練官は部屋の中央に陣取り、左右に目を光らせている。係が交代前に訓練員の行進を停止させるのを忘れ、一人が前に飛ぶ。私はドキッとする。訓練官は訓練員に吠え、AF 3 4 1 優劣レポートを出そうとし、しまい、また出す。

着席後、私は顔を皿から至近距離に保つ。側には女性訓練員が3人いて、みんな黙々と食べている。鶏胸肉を切り分け、グニグニを避けて、肉の乾燥を誤魔化すためにケチャップをぶっかける。十分しかない。きつと消灯の後、南部の女性訓練員がペンシルバニアのケチャップ気狂いの話を小声でするんだ。私は南部の小さい町からきた人の意見なんて気にしない

ふりをする。南部の人は多分グレービーがお好みなんだろうけど、私はケチャップの酸味が鶏肉のゴロコロを食べやすくするんだと思っている。即席マッシュポテトの乾いた塊が喉に詰まっているのを、静かに堪える。美味しくないものを飲み込むより、時計を見ているのを見つけられる方が怖い。

夕食後、訓練員がシャツと靴下と下着を丸める基本を教えてくれる。まあ、目的はあるにしても、絶対必要ない。空軍において全てがそうであるように、衣服もきれい、清潔で、シワが無いものでないといけない。訓練員が模範を示した後、簡単な質問をする。

「どうして空軍に志願したのか？」

他の女性達は、虐待から逃れた話や、子ども達に素晴らしい事が出来るお手本になりたい希望や、溢れ出る愛国心について話す。私は志願した正当な理由を一生懸命探す。両親の家から出なければならなかった。大人になる第一歩を踏み出さなければならなかった。両親に誇りに思っていて欲しかった。両親に愛されたかった。

「お金です。私は貧乏ですけど、学校に行きたかったんです。」自分自身を引き止められず、吐き出してしまう。

みんな少し驚いたようだが、すぐ次の女性訓練員の番になった。恥ずかしくて頬が熱い。実際、頬がミニトマトの様に真っ赤になり、部屋が眩しく見える。私は瞼を閉じる。私って、色んな意味で自己中心的で、厚かましくて、取るに足らない。（どうして愛国心が無いんだろう。どうして命を犠牲にする事が疑問なんだろう。こんな風で母さんが誇りを持ってくれるんだろうか？）目を開けると、訓練官は部屋を出ていくところで、女性訓練員達はシャワーを浴びる準備をしていて、私はベッド脇に一人で立っている。

就寝前、一日中訓練した体に栄養補給するため、プロテインバーとバナナを食べよう指示される。幸いな事に、私と隣の訓練員が私のプロテインバーと彼女の空袋を交換したのを、訓練官は気が付かなかった。グラノーラの間に挟まっている人工苺の乾いたつぶつぶは、薄茶の舗装道路に散らばっている恙虫を連想させる。グラノーラにかかっているダークチョコレート栄養つぶりで、疲れた体の栄養補給に良いらしいが、カサカサのグラノーラが喉の奥に引っ掛かる感触が我慢できない。結果、腕や脚に黄緑色のあざがあるまま歩き回る事になる。他の女性訓練員達は、私の皮膚が腫れているのを心配してくれるが、私にとっては、努力の証だ。単調な毎日、何かの成果を上げていると勇気づけられるには、証が必要だ。

食料と引き換えに、隣の訓練員は売店で買ったルーデンのさくらんぼ味の喉飴をくれる。そして、袋プディングの作り方を教えてくれる。ココア、ピーナツバターとごく少量の牛乳を混ぜるのだ。初めて台所をパトロールした時、その民間人が教えてくれたのだ。その混合物は濡れたコンクリートの感触がある。私はストレスのせいで体質が変わってしまった。そ

のせいで新陳代謝の過程で体ができるだけ栄養分を吸収して、痛いほどの便秘の原因になっているようだ。混合物のお陰で何とか体調を取り戻した。瞬く間に航空隊全員がそのおやつを食べるようになった。

これは、軍の食事で唯一楽しめる甘味だ。

七週間もすると、食事のメニューのローテーションを覚えてしまった。煮た鶏肉とマッシュポテト、四角いピザ、米飯にダマの混じったグレービー、乾いたスパゲティと蒸し野菜。朝食は、一日おきに小さいホットケーキと膨らませたフレンチトーストが出る。ベーコン二枚に、シロップをつけるのが美味しいと発見した。でも、水でもどした卵とチーズのオムレツは食品添加物の匂いがきつくて湯気が熱い。軍の中では空軍の食事が一番いいが、やっぱり大量生産された食事は近頃暇つぶしに頭で描いているような食事と比べ物にならない。

教科書をぼんやり眺めながら、うちの母さんの台所でトマト、油、酢を煮詰めながら額が汗ばんでくる光景を思い浮かべる。ひとしきり混ぜる間、卵、小麦粉とじゃがいもを生地に練る。以前は、ガスコンロの熱で頬が熱くなるのに文句を言っていた。何時間もトマトソースの番をした後、スプーンを母さんの仕事場に持っていく。母さんは味見をしながら、思慮深く頷く。

「ちょっと見てください、この子は自家製ソースを作りましたよ。大したものでしょう。」

母さんはズームのスクリーン越しに、上司にほくそ笑んで話し、私はカメラに手を振る。

「ちょっと塩を足したら。」母さんは私にウィンクして台所に戻らせ、私はもっと褒められるように奮闘する。私は母さんが微笑んで、青い目をキラキラさせる、ああいう時間に飢えている。

私は、こんな時間に戻りたくてたまらない。

もっとこんな時間を過ごしたい。

水曜日はピザの日だ。ソースとチーズはまずいが、生地についているソースをナプキンで拭き取って、ケチャップをつけると生地でお腹がいっぱいになる。私達が昼食のために下に降りて行くと、今まで会った事の無い訓練官が腕を激しく振りながら、私達に叫ぶ。

「上に行け、今だ！」

階段が薄暗いので、混乱は避けられない。サイレンが鳴り響く。私達は外が雷なので、天気の影響で外に出られないと推測する。寮に戻ると、

「ALICE ALICE ALICE」(1)

と警告が聞こえた。女性訓練員達は、何事かと囁き合った。寮のリーダーが、訓練員が新たな情報を知らせに戻ってくるだろうと言って、航空隊達を落ち着かせようとする。私はどうなるのか分からない思いで神経が張って、寮のリーダーに横手で話をする。

私は勤勉な学生で教科書をちゃんと読んでいるから、こんな時はどうしたらいいか知っている。だからリーダーに言う。「ヒルソン、危険人物侵入だ。隠れなきゃ。」

「訓練かもしれない。」リーダーは首を左右に振る。

「それでも隠れなきゃ。」

リーダーは溜息をついて、頷き、航空隊に指示する。私達はロッカーの隙間やベッドの下に身を隠す。私達の建物は爆破されないように出来ているが、もし誰か侵入した場合は私達の M4 ライフルは役に立たない。自分達の安全のために、私達の武器が殺す事が出来ないなんて、何て皮肉な話だ。

壁が分厚いので、銃声は聞こえない。静寂の中で、私達は何が警報の原因になるか思い巡らす。私は銃を持った侵入者が門を通り抜けたか、はたまた基地の訓練所に来たか知りたいと思う。（どれだけ危険なんだろう。私達が隠れている間、侵入者は廊下を歩いているんだろうか。基地に何人も居る軍人達に撃たれたらどうか。）私達は、走り書きを手渡し合ったり、囁き合ったりしながら長い間待つ。やっと訓練官が一人寮に入ってくる。訓練官は、門の近くで本当に何か有ったらしいと教えてくれる。暗闇の中で、訓練官は椅子を引き寄せ、私達に話す。それが、訓練官が初めて小さく笑って、私達の恐怖心をなだめてくれた時だ。時間を潰すために、私達は卒業後何が楽しみか話し合う。

何人かは、コロナウィルスで祖父母が亡くなってしまってから、家族に会うのが楽しみになったと言う。他の隊員は自分の子供の笑顔が見たいと言う。基礎訓練が終わってからも連絡を取り合おう、と約束する。そのうち一人は、最近ユダヤ教徒になったが、初めてのハヌカに私を誘ってくれる。もう一人は、私達が門番の時、偽の爆弾を避難場所から運び出した話をして笑う。彼女は慌てて驚いたが、彼女が「ワイリー、私はまだ爆弾を持っているわよ。」と言うと、私は心配しないでと言う。

私が秘密を守っていることが必要だとしても、彼女が合格する手助けをしたい。

私の番が来ると、私は母さんとスパゲッティ・サンドイッチが食べたいと言う。

訓練官は鼻に皺をよせ、航空隊員達はペンシルベニアの食べ物は気持ち悪いと合意する。すぐ次の人が話す番になり、みんな私が食べた事の無い食べ物について回想する。心温まるグリッツに塩、お祭りで食べる暖かいゾウの耳の形のパイ、川で採れたてのザリガニ。しかし、目を閉じてロッカーの冷たい金属に頭をもたれかけると、やっぱり母さんの顔が浮かんできて、母さんの白い巻毛の柔らかい光、コンロの暖かさ、母さんの指からトマトソースが垂れている様子を思い出す。

訳註

（１）ALICE とは、外部から武器を持った人間が侵入した事を告げる警告。

Alert = 警告

Lockdown = 施錠

Inform = 情報提供

Counter = 抵抗

Evaluate = 避難

の頭文字を繋げたもの。

Spaghetti Sandwiches

On my nineteenth birthday, my mother and I stand side by side over a pot of steaming spaghetti. The kitchen lives permanently in 2006 with cherry cabinets, the occasional Tuscan inspired dish cloth and dim yellow kitchen lights which turn the large blue pot greenish. We toss the noodles in jarred Ragu sauce, the same brand my mother has insisted on all my life. At the circular kitchen table, we butter two slices of white Italian bread each and make spaghetti sandwiches inspired by my grandfather's habit of eating everything between two slices of white bread.

The bread is squishy; it sticks to the top of my mouth and makes devouring the sandwich difficult. The sauce squeezes out the back and down my hands, staining my fingertips orange. The noodles are soft, but bitey and slightly salty. After a long day, I find my heart and stomach full, sitting across the table from my mother, and indulging in a simple sandwich.

Two weeks later I ship out for basic training from Philadelphia. The drive isn't very long, the morning fog muting our usual chatter. I blame it on a mixture of nerves, early morning exhaustion, and an inability to broach the topic of my departure. I've been briefed by every family member who has served before me, and each of them concurred that "I'll be fine." Despite this, I can't stop the dread that slicks my palms, or the premature homesickness that makes my stomach ache. At the airport my mother squeezes me tightly on the curb as my younger sister and I disappear inside the terminal. Thanks to my newfound military status, my seventeen-year-old sister is allowed to sit at the gate with me. Seated on a bench together, we scarcely talk. I can tell she doesn't know what to say and I feel slightly embarrassed for not knowing how to keep from crying. In some way, I feel as though my inability to remain strong in front of her is disappointing. She should look up to me, and yet I cannot meet her gaze. When my boarding number is called, we hug strangely before I watch her scurry down the terminal to go back home.

I wish I could go with her.

When I find my seat on the plane, I begin to choke and sputter. No matter how I frame it, I do not want to leave my home, and I do not want to join the military. To hide my distress, I press my face against the chilly airplane window, hoping the coolness will dispel my panic. Through shuddering breaths, I try to prepare for the next eight weeks I'll spend at Lackland Air Force Base in San Antonio, Texas. After two layovers and one silent bus ride, I step out onto the tarmac of the base. My gait is stiff from being curled up in small airplane seats all day, a trip that has spanned nearly twelve hours. My eyes stay glued to the concrete as I recognize the infamous black hats my father had spoken of with an uncomfortable twitch in his shoulders. I stick closely to the exterior of our crowds. One misstep and the black hats are in countless trainees' faces, brims tapping the trainees' foreheads, their screaming faces tinted red under the Texas sun.

On the pad we receive our gear: a black backpack, a reusable water bottle, a notepad, pens, a Basic Military Training textbook, nail trimmers, foot powder, trash bags and laundry bags, a reflective belt, a padlock, towels and a storage container. After, we are separated into lines before they rush us off to our squadron which is a large tan building lifted onto concrete pillars, with a drill pad underneath. When we pass the pillars and walk underneath the building, today's tears prick my eyes again. A large atrium houses a massive American flag, longer than a basketball court, which catches the light of the sunset.

My chest feels fuzzy, a combination of tightness and fluttering. The pride to serve my country, and the disgust to join the machine. I line up with my flight, sit down when told to, and pull a muddy greenish package from my supply bag.

My Military Training Instructor shouts at us, explaining how to operate the Meal Ready-to-Eat. I struggle with the thick plastic, my shaky hands and sweaty palms unable to grip it. Beside me, another MTI screams and spits at his flight, forcing them to shout “U.S. AIRFORCE” as they stand at attention, then sit down, then stand again. The sound echoes off the concrete ceilings, making my skull and spine vibrate. The clatter of their bodies as they hurriedly shuffle while their MTI spits at them makes my head feel clouded with noise. I had been warned about Basic, and yet the screaming and shuffling and sweating still shake me.

I try to breathe slowly and stop the fluttering of anxiety and vomit in the back of my throat, but my fingers are slippery and weak. As I fumble with the plastic, I become more and more fearful.

Tan boots stop beside me, “Trainee, do you need help?” I glance upward, unable to see the face of my MTI beneath the brim of his hat.

“Yes.”

“Yes, *sir!*” He leans down, barks in my face, and tears the package open. When he hands it back to me, I notice the label—Southwest Beef and Black Beans. I dig through the package, grimacing. Inside I find some cheese spread and a meat stick.

I don’t dare to touch the packet containing the actual meal.

I never liked black beans, especially their texture and smell, so I don’t bother with them. The cheese is thick, salty, and rubbery. I suck it out of the packet between bites of the meat stick, which is hard to tear off. I hunch over like an animal, alternating between cheese, then meat, until my jaw is sore from chewing. The scene is visceral. My hunger swarms and knots with my fear. *How quickly can I fill my stomach?* My eyes roll from side to side, spotting boots, scraps of MRE plastic, and saliva hanging off the other MTI’s lips. In my frenzy I can feel one thing: I am hungry, hungry, hungry. Before I can scrounge for more food, ten minutes have passed and my MTI lets us know that our time is up. We run upstairs to our dorm, change, and lie down in our cots.

In the dark, I can still hear the male flight yelling. “U.S. AIRFORCE, U.S. AIRFORCE.”

In week three, I have learned to fear the Dining Facility.

I stand at attention outside the squat, wide building, eyes pinned to the back of my wingman’s head. Our chow runners are inside, announcing our presence to the MTIs. I feel bad for them but have somehow evaded being in their position in the last three weeks. I have never seen them at work, but I have heard the nervous edge in trainee’s voices when they recount their days in the job. Announcing our flight’s arrival to the DFAC seems simple, but I am terrified of the attention on them, the MTI who they present to in the DFAC, and his booming, scratchy voice.

When we enter the food line, we sidestep with eyes forward. MTIs stalk behind us, but the civilians who serve us food are kind. They smile when I remember to say, “thank you” as they give me a heaping scoop of powdered mashed potatoes and boiled chicken breast. I clutch my tray tightly, march to my chow runner, and right face to my seat. The MTIs sit at the center of the room, eyes roaming with intensity. I jump when one pounces on a chow runner who forgot to

move to parade rest before changing shifts. He barks at the trainee to present her AF 341 Excellence/Discrepancy Report, put it away, then take it out again.

Once seated, I keep my face inches from my plate. Three other girls sit with me, each shoveling food down. I have ten minutes to pick apart the chicken, avoid the slimy bits and try to drown any dryness in ketchup. Later during lights out, the girls from down South will whisper about the ketchup-loving freak from Pennsylvania. I pretend not to care what a bunch of small-town southerners think. They prefer gravy, but I find that the sourness from the ketchup makes the gristle from the chicken go down smoother. I gag on clumps of dehydrated potato quietly. I am more afraid of being caught looking at the clock than swallowing something unsavory.

After dinner, our MTI shows us the standard way to roll and store our shirts, socks, and underwear. It is proficient, with a purpose, and yet exceedingly unnecessary. Like everything else in the Air Force, your clothes must neat, clean, and wrinkle free. As my MTI finishes his demonstration, he asks us a simple question, “Why did you join the Air Force?”

Other women begin to recount tales of escaping from abuse, a desire to show their children they can do great things, or an overwhelming love for their country. My mind races to find some great reason to enlist. I need to get out of my parents’ house. I need to find footing as a freshly formed adult. I need to make my parents proud. I need them to love me.

“Money. I’m poor. I want to go to school,” I blurt out before I can stop myself.

The room seems a little surprised but moves to the next girl quickly. My cheeks begin to burn with shame. In fact, they’re so cherry tomato bright the room begins to glow. I pinch my eyes shut. I am selfish, greedy, unremarkable in every way. *Why am I not a patriot? Why do I find an issue with becoming cannon fodder for my country? If I feel this way, can I still make my mother proud?* When I open my eyes again, my MTI is leaving the room, the girls are gathering their shower supplies, and I am standing alone by the bedside.

Before bed, we are told to eat protein bars and bananas to compensate for the protein our bodies need to recover from our nonstop training. Luckily, the MTIs do not pay close enough attention to notice when I slip my protein bar to another girl in exchange for her empty wrapper. The dried bits of artificial strawberry nestled between the granola remind me of the little red chiggers I saw skittering around on tan pavement. The dark chocolate drizzled over the bars is supposed to be nutrient dense and allow our tired bodies to retain some ability to bounce back, but I can’t stomach the way the dry granola coats the back of my throat. As a consequence, I walk around with green-yellow bruises on my arms and legs. The other girls point out my sallowness with concern, but to me, they are badges of my hard work. In order to push through each monotonous day, to feel like I am making progress, I need evidence of my courage.

In return for the extra food, the girl gives me extra Luden’s Wild Cherry cough drops from the commissary and tells me about packet pudding—a mixture of hot chocolate powder, peanut butter, and very little milk. During our first round of Kitchen Patrol, one of the civilians told the girl about it. The mixture has a texture similar to wet concrete. Stress has altered my body’s functions, forced my metabolism to soak up every nutrient it can grab and painfully constipate my organs. With the help of the mixture, my body finds its rhythm again. Soon, my entire flight takes to the treat.

It is the only sweetness I can savor in the DFAC.

During week seven, I have learned the menu rotations. Boiled chicken and mashed potatoes, square pizza, and rice with clumpy gravy, dry spaghetti and mixed steamed veggies. Every other day, the breakfast item switches between a miniscule pancake and deflated slice of French toast. I learn to love the two strips of bacon dipped in syrup. However, the rehydrated egg and cheese omelet still smells too much of preservatives and hot steam. Although the Air Force eats the best, the mass-produced meals cannot compare to the meals I have dreamt up in my head to pass the time.

When I stare blankly at my textbook, I daydream about the sweat on my forehead as I reduce tomatoes, oil, and vinegar in a pot in my mother's kitchen back home. Between bouts of stirring, I fold eggs, flour, and potatoes into a dough. The heat from the stove makes my cheeks warm, something I would have previously complained about. After hours of checking the sauce, I run a spoon to my mother to my mother's office, who nods thoughtfully as she tastes it.

"Look, she made homemade sauce. Isn't that great?" My mother gloats as I wave into the Zoom camera where she is talking to her boss. "Just needs some salt." She winks and pushes me back to the kitchen, where I resolve to labor harder for another second of praise. I starve for those moments, the smile and crinkle of my mother's blue eyes.

The urge is insatiable.

I need more.

Wednesday is pizza day. I hate the sauce and cheese, but the crust fills my stomach if I wipe it clean with a napkin and substitute the toppings with ketchup. As we file down the stairs for lunch, an MTI I have never seen before flails his arms and yells at us.

"Go back upstairs! Now!"

Chaos in the stairwell ensues as the lights dim. An alarm blares. We assume there is lightning in five, that we cannot be outside because of the weather. It is not until we retreat into our dorm that we hear the call of "ALICE ALICE ALICE." Girls whisper to each other, speculating what it could mean. My dorm leader tries to calm our flight, ensuring us that our MTIs will return with news soon. I pull my dorm leader aside, gut clenching with uncertainty.

Because I am a good student and have been reading my textbooks and know, I tell my dorm leader, "Hinson, it's an active shooter. We need to hide."

"It could be a drill. . .," She begins, shaking her head.

"We should still hide."

My dorm leader sighs, nods, and informs our flight. We press ourselves between lockers and under cots. Our building is blast proof, but if someone were to get in, our M4s are nonfunctional. How ironic that in the name of safety our very own weapons lack the capability they were made for—to kill.

The walls are too thick to hear the popping of gunfire. In the silence we are left to imagine what could cause the alarm. I wonder if the gunman has passed the gates, or if his bullets have reached the training side of the base. *How much danger am I in? Does the gunman stalk the halls as we hide, or has he been struck down by the countless military personnel on base?* We wait for a long time, passing notes and whispering. Finally, one of our MTIs enters the dorm. He tells us that he heard something happened down by the base gate and that what is happening is real. In the darkness of the room, he pulls up a chair and talks to us. It is the first time he laughs softly with us and comforts our fears. To pass the time, we go around the room and talk about the things we look forward to after graduation.

Some girls look forward to seeing their families after COVID had taken their grandparents. Other girls miss the smiling faces of their children. We make plans to stay connected after Basic. One girl invites me to her first Hanukkah as a newly converted Jewish woman. Another one laughs as she tells the story of when she carried a pretend bomb out to an evacuation site during the drill when we were door guards.

She was so flustered and surprised, but when she said “Wiley, I still have the bomb,” I told her not to worry.

I would help her pass, even if all I needed to do was keep a simple secret.

When it is my turn, I tell them I miss spaghetti sandwiches with my mom.

My MTI crinkles his nose and my flight agrees that Pennsylvania food is gross.

They quickly move on, reminiscing about foods I have never eaten—hearty grits with salt, warm elephant ears from the fair, and crawdads fresh from the creek. But when I close my eyes and lean my head against the cool steel of the locker, I can still picture my mother, the soft halo of her curly white hair, the warmth from the stove, and the sauce dripping down her fingertips.

© 2025 Lili Wiley.